

# 国語科における教科の本質に迫る授業づくり

国語科 青田 美香・坂井 昭彦

## 1 教科の本質とめざす生徒の姿

今日、グローバル化やメディアの多様化と相まって、多種多様な価値観や情報があふれた現代社会において、自分とは異なる価値観や主張に出会った際、それらを否定するのではなく相手（配信者や筆者等）の主張やその背景に思いを馳せて理解していくことが求められる。さらに、主張や主張の背景に疑問（問い）\*<sup>1</sup>を抱き、その解を追究するために、必要な情報を収集、分析し、それらの確かさや価値について多面的に検討する中で、自分の考えを広げたり、深めたりすることとなる。このことは、これからの社会を生きる生徒たちにとって重要となる。

中学校学習指導要領（平成 29 年度告示）では、「目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈すること。」「読むこと 精査・解釈」「文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること」「読むこと 考えの形成、共有」と記されており、目的に応じて、複数の情報の中から適切な情報を得ることや、それらと自分の既有知識や体験と関連付けながら考えを広げたり、深めたりすることが重要となる。

以上のことから、国語科の授業では、問いを立てて、その解を追究する中で、複数の情報の中から適切な情報を得たり、それらと自分の既有知識や体験と関連付けたりしながら考えを広げたり、深めたりする資質・能力を育みたい。ここに国語科の本質があると考えられる。

### 【国語科における教科の本質】

問いを立てて、その解を追究する中で自分の考えを広げたり、深めたりする資質・能力を身に付けること

### 【国語科における教科の本質を踏まえた生徒の姿】

問いを立てて、その解を追究する中で、複数の情報の中から適切な情報を得たり、それらと自分の既有知識や体験と関連付けたりしながら、自分の考えを広げたり、深めたりすることのよさを実感している

## 2 当校の生徒の実態と具体的な手だて

当校の生徒は、筆者の主張や論理を読み取ったり、筆者の主張に対して、自分の意見を述べたりすることができる。

しかしながら、主張を自分事として理解したり、主張の背景やその意図に思いを馳せて理解したりすることに不十分さがある。このことは、書かれている内容や主張を生徒の既有知識や体験と関連付けながら読み取らせることや、なぜ筆者がその具体例・事実を選択したのか、なぜ、その語句・表現を用いて説明しようとしたのか、その主張の背景にはどのようなことがあるのかについてまで追究させることに不十分さがあったことを示している。だからこそ、文章中に書かれている内容や主張を生徒の既有知識や体験と関連付けながら読み取らせることを通して、相手の主張をより身近に実感させることが重要となる。このような実感

\* 1 本実践では、「問い」は生徒が自分の疑問を大切にしながら立てるものであり、文章を読み、熟考する中で解を見いだすことができる疑問としている。なお、「課題」は生徒の問いを基に教師が整えたものとしている。

が促されたとき、生徒は主張の背景やその意図に思いを馳せて、用いている語句・表現の必然性や論理の確かさについて、筆者の意図と関連付けて吟味し、理解しようとするのである。さらに、自分の考えを表現したり、他者とかがわり合ったりする活動を通して、自分の考えの広がりや深まりのよさを実感するのである。

当校の生徒の実態と授業で目指す生徒の姿から以下の手だてを講じる。

#### <手だてア>

問いを立てさせて、その解を追究していく単元構成とする

必要な情報を収集、分析し、文章中に書かれた内容と生徒の既有知識や体験等とを関連付けながら筆者の主張とその背景をとらえようとする目的意識を醸成させるために行う。生徒に問いを立てさせて、その解を追究する活動を組織することで、言葉の表面を追うだけでなく自分が調べた新たな情報と既有知識を関連付けながら筆者の主張とその背景をとらえることとなる。生徒は、初読の感想と疑問をまとめる。そして、疑問について、その疑問から①「すぐに解がわかる疑問」、②「文章を読み、熟考する中で解を見出すことができる疑問」、③「文章を読み、熟考しても解を見出すことができない疑問」に分類する。ここでは、②「文章を読み、熟考する中で解を見出すことができる疑問」を「問い」とする。このように、生徒は、初読後の「問い」の解を追究する活動の中で、自ずと関連した資料を読んだり、関連した情報を調べたりする活動を行う。その中で、筆者の主張とその背景を自分事としてとらえることとなる。

#### <手だてイ>

書籍紹介やリーフレット作成等の学びを可視化する活動を組織する

生徒の自身の考えを明確にさせるために行う。これまでの学びを可視化する工夫をさせたり、蓄積させたりすることで、一層、自分の考えを明確にすることとなり、何がわかって、何が曖昧なのかを理解することとなる。さらに、書籍紹介やリーフレット等、自分の考えを可視化する活動を組織したり、自分の考えを伝え合う活動を組織したりすることで、関連した複数の資料（社会的な事象や文化の継承に関連した複数の資料等）と既有知識とを関連付けることとなる。

上記の活動を通して、生徒は、言葉の表面を追うだけでなく、実感をともなって具体的に読解することとなり、筆者の主張やそれに対する自分の考えを形成するのである。さらに、自分の考えを伝え合う活動や筆者の主張やそれに対する自分の考えについて、単元の導入時と終末時を比較することを通して、自分の考えの広がりや深まりのよさを実感するのである。

#### 【引用文献・参考文献】

- ・ 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校研究紀要第 48 集，2003 年
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校研究紀要第 56 集，2013 年
- ・ 新潟大学教育学部附属新潟中学校研究紀要第 57 集，2014 年